

「まあね」

名取暢

列車に乗っていると、気になるのが、自転車である。田舎に帰る列車の中で、ふと「自転車だいじょうぶかなー。」などと心配になる。よく考えてみると、ツアーではないので自転車は持ってきてないのである。それほどもでに自分の場合旅と自転車が付着しているんだなあ、なとこのごろ思う。よくよく考えてみると自分は今まで自転車なしの旅は、した事がないのである。列車に乗る時はたいてい（田舎に帰る時は別）重い自転車を肩にかけ他の乗客には、白い目で見られ「まっしょ」と言っていて列車に乗り込むのが常である。

田舎でたまに高校の時の同級生に会う。「今年の夏はどこかにいったかよー。」と聞かれる。それに対する自分の答えは「いつも自転車でちょっとよ。」である。自転車であつとよと答える時相手はいつも「また自転車かー。」と口をとがらせる。「そんなに自転車がいっかがよー。」と聞かれる。自分はいつも「まあな」とニコニコしながら答えるのである。相手はあきらめて、自分の旅の話に耳を傾ける。そして最後には、このように言うのである。「おまえも、いっかがげんに免許を取れよ。もうチャリンコをころがして喜んでいるとしでもないだろう。」いっこの間にか田舎では、名取が免許を取らないうのは、自転車のせいでと思われているのである。まったくは否定できないうが、自転車に乗ることと

、免許を取ることはま、たく別問題である。「名取く〜ん、久しぶりね。」と女の子に会うと言、てくる。「そう、土木科にいるの、名取君らしいわね。」とまず言う。次に「え、サイクリング部、うそみたい、それほんとー？」と言、て笑うのである。名取君は土木科にはい、たして、サイクリングには無縁の人に見えるらしい。こう思われるのも、自分としては、ま、たく否定できない事なんだが、多少が、かりする事でもある。「それじゃあ、ミニサイクルにほんか乗、て、リンリンしてゐるわけー？」と多分に軽蔑、ぽく聞かれる。そういう人に誤と説明するのはたいへんであるので、自分はいつも「まあーね」と答えておくのである。多分そう聞く人の頭の中では、次のような式が出来てゐるのである。サイクリング=ミニサイクル、リンリンキ名取君。正確には、名取君ではなく、名取君のイメージである。自分でも前から、ある程度は、この事に気づいてゐたのだが、それにも増して、自分の自転車熱は、高ま、ていくばかりである。

「おまえ、家庭教師のバイトしてんのかー、金たまるだろう。」
 「そうでもないよ。」
 「1ヶ月くらいだ。」
 「2万円位かなー。」
 「何に使うんだい？」
 「たい部分自転車にっぎこんでるわー。」
 「また自転車か、」
 「まあーね。」
 「そんなに金がかかるもんか？」
 「まあーね。」
 金なんか、かけたくなければ、かけなくともあむものである。部品にしても、こわれた所だけ、はおしていけばいいのであって、その他には金はかからない

3
だがどうも、自分はそうではないらしい。次から次へと新しいものを買って、まきまきは、喜んでゐるのである。どうも麻葉の味を覚えたみたいなき感がある。自分はこれがけしきと思つた部品は、できるだけの事をして買ったのである。3度の飯が1度になつても、パンツを買うお金をまわしてでも、なにしろ買って、自分の自転車につけてみたもののだから仕様がな。性能がどうだこうだではないのである。「まきまき、こうしてゐるな。日しきな」ただそれだけ買って買う理由は十分である。性能がどうのこうのは、便まつみまきからの事だと自分では思つてゐる。日曜日、気にしたパーツをつけて多摩川あたりを、四方の景色を見ながら、ゆっくり、ゆっくり走るのが、一番の楽しみである。(このごろ、やま、まきまき)走りながら、チラッと新品のパーツを見てニターとするのがなんともいゝのである。完全に自己満足の中に浸りながらぶらぶら走るのである。何が「まきまき」と言つても、この自己満足は最高である。ニターとする自分の顔が想像できる。この最高の自己満足を得るために、パンツを買う金もおしんで、部品を買うのである。自己満足であるから、自転車についてあまりいらぬ友人には、わがまつもらわなくても良いのである。だからくどくど説明する必要もなく答えは「まあ、ね。」となつてしまふのである。

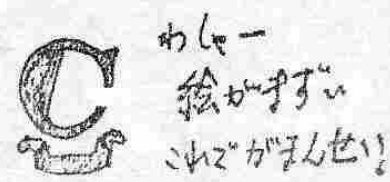
「名取、今度の休みは車でどこかに行こうぜ！」

「名取君、まきまき、うよ、総君も誠司君も「くよ！」」

「今度の休みがー。ちよっとな。」

「また自転車かよー。おまえいつも自転車、自転車であいてる休みは、ないじゃんかよー。」

「そんなら自転車の旅、そいいの？」



「まあーね。」

my CHERBIM

ほんとうに「まあーね」である。「まあーね」としか答えようがないのである。どうしても自転車で旅を試してみたいのだから仕方がない。「どうしても自転車でなければいけないの、車だ、ていっじゃはないぞ」確かに車だ、ていっだろう。しかし自転車でいまたいのだから仕方がない。自転車でいまたいと思うのだから無理して車でいく必要もないだろうし、また自転車でいまたいという気持ちにむりやり、いろいろ理由もつけたくない。だから答えにいろいろごたくもやらべする必要もない。しいて言えば「君もチャリンコヤ。そいな。」である。しかし答えは、「チャリンコも？」である。言うだけ損の感がある。だから自分の答えは「まあーね」にする。さしもう。「おまえ、これからチャリンコ続けていく気か？」、「まあーね」。「30才、40才、じいさんになつてもか？」、「まあーね。」

たぶん一往「まあーね」と言いながら、友人にバカにされながらお気に入り部品をつけて、ニターとしながら、自転車にまたかっ、ているでしょう。列車に乗っている時には「自転車だいいょうぶかよー。」などと心配しながら・・・。

おわり